

‡ Program Notes ‡

1 歌劇「魔弾の射手 (まだんのしゃしゅ)」序曲 C. M. v. ウェーバー (1786-1826)

ウェーバーの代表作「魔弾の射手」は、ドイツ・ロマン派歌劇最初の成功作として知られる。物語はドイツの古い伝説に基づき、恋人と結婚するためには射撃競技に勝たなければならない狩人マックスが、悪魔に魂を売って手に入れた魔法の弾を使ってしまい、その不正が露見し追放を命じられるというもの。オペラ全曲中、有名な「狩人の合唱」とならんで広く親しまれているこの序曲は、序奏付のソナタ形式により、劇中の音楽を配しながら物語全体を集約する形で展開する。4本のホルンによって奏でられる序奏部の主題は、「秋の夜半」として特に広く知られている。

2 ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op. 64 F. メンデルスゾーン (1809-1847)

ベートーヴェン、ブラームスの作品と並ぶ「三大ヴァイオリン協奏曲」の一曲として名高いこの作品は、1844年、メンデルスゾーン35歳の時に作曲された。この年メンデルスゾーンは、ベートーヴェンの〈ヴァイオリン協奏曲〉の初演以来38年ぶりの再演を指揮して、その真価を世に知らしめたが、まさに生まれるべくして生まれたといえるのがこの名作である。ロマン的な情感と古典的な形式美がすぐれたプロポーションのもとに融合し、また、華麗なテクニックをちりばめた独奏パートの魅力にかけても完璧なまでの冴えを見せるこの協奏曲は、メンデルスゾーンが常任指揮者の任にあったライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスター、フェルディナント・ダヴィドの協力を得て完成され、彼に献呈された。曲は全3楽章からなるが、各楽章は切れ目なく続けて演奏されるよう指示されている。これは、各楽章の流動性を中断させないための配慮であり、メンデルスゾーンは他にも、当時はまだ奏者に任されることが一般的だったカデンツァをすべて作曲するなど、作品の細部にまで完璧さを求めている。

第1楽章：アレグロ・モルト・アツパッシオナート（ソナタ形式）。

第2楽章：アンダンテ。

第3楽章：アレグレット・ノン・トロppo（序奏）－アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ（主部）。

3 交響曲第5番 ハ短調 Op. 67「運命」 L. v. ベートーヴェン (1770-1827)

ベートーヴェンの代名詞といえるほどに広く愛好されているこの交響曲、「運命」のタイトルで親しまれているが、実はこのタイトルが日本以外の国で使われることは少ない。由来は、第1楽章冒頭の4つの音符についてベートーヴェンが、弟子のシントラーに「運命はこのように扉をたたく」と語ったという有名な逸話による。耳の病を強靱な生への意志で克服した作曲家の不屈の魂を象徴するようなタイトルである。一方、純粹に音楽的に見ても、この作品が円熟期のベートーヴェンならではの特質を備えた傑作であるのは間違いない。4音の動機を徹底的に展開するすぐれた造形性や様々な大胆な試みをはじめ、ベートーヴェンは「交響曲」という形式的な発想だけにとどまらない、聴き手の心にダイレクトに訴えるような音楽を書いた。この傑作には、そうしたベートーヴェン独自の斬新な音楽的要素が、見事に凝縮された形で結晶しているのである。

第1楽章アレグロ・コン・ブリオ（ソナタ形式）。

第2楽章アンダンテ・コン・モート（変奏曲形式）。

第3楽章アレグロ（スケルツォ楽章）。

第4楽章アレグロ。

柿沼 唯 Yui Kakinuma (作曲家)